

## 「農」へのこだわりと新たな挑戦

校長 阿部 孝

私の教員としての初任校は、本校の前身である上山農業高校です。(昭和57年4月)「<sup>じこうじりつ</sup>自耕自立・<sup>りゅうかんごとう</sup>流汗悟道」の精神のもと、主に農業自営者の養成を使命とした高校でした。当時の1年生は、自宅から離れて「弥栄(いやさか)寮」での寮生活を送ることが義務づけられ、家畜や農作物の世話をしながら農業の基礎を学び、集団生活の中で、協同の精神を身につけていったのです。私は保健体育科の教師ですが、生徒達と一緒に寮の舎監として宿泊し、田植えや稲刈り、伝統の案山子作りや種無しブドウのためのジベ処理など、貴重な農業の体験をすることができました。そして、私自身も農作物を“育てる喜び”と“収穫する喜び”を実感しつつ、教師としての一步を踏み出したことが、今でも鮮明に思い出されます。

あれから30数年が経ちますが、本校は新しい学校に生まれ変わり、創立以来24年間これまでの伝統を継承しつつ、着実に一步ずつ歴史を積み重ね、新たな伝統を築き上げてきました。これはこれまでの農業クラブの各種大会での数々の実績にも現れています。これからも更なる活躍を期待します。

さて、農業は生命体(生きもの)を相手にするもので、毎日決して手を抜かず世話をしこそ良質の作物となります。ですから一年単位ではなく、長い年月をかけて成功と失敗そして試行錯誤を繰り返しながら、先人から受け継いだ知恵や実績を、次の世代へと繋いでいくのです。簡単なようで大変なことです。

年末の新聞に「試される農家のこだわり」と題して、“あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト”で最優秀金賞に輝いた大河原弘さん(川西町)の記事が載っていました。全国各地で様々な地域ブランド米が開発される中で、米づくりの面白さは、消費者が求める食味、外観、粘り、硬さなどを掴み、いかに栽培方法にこだわり、工夫すること。そして農家仲間と経験や取組みを共有し、共に切磋琢磨しながら、地域ブランドを確立させることが魅力とのことでした。

昨今、地域で長年育まれ、高い品質や評価されている農産物等を、知的財産として保護する「地理的表示『G I』制度」が話題になっています。山形でも「山形清酒」が一昨年「米沢牛」と「東根さくらんぼ」が昨年『G I』に認定され登録されました。これまでの農業は、薄利多売の世界でしたが、これからは量より質が強調されています。当然ですが質がよく収穫量も多ければ、利益も大きく、経営をより安定させることができます。

皆さんには、「時代の進展に即した農業と地域産業に対応できる人材」になることが求められています。授業や実習をとおして、農業の基礎・基本を学び、そして、農業クラブの各種活動の中から、広い視野と高い志をもって、様々なスキルと新たな挑戦をし続ける力を身につけることを願っています。